

論文の要旨

論文題目 コーパスを利用した現代日本語における反復構文の記述的研究
氏名 清水 由貴子
学位 博士（文学）
授与年月日 平成24年6月29日

本研究は、現代日本語における反復構文の意味を詳細に記述し、それを積み重ねることによって反復構文の体系化を目指すものである。本論文では様々な反復構文のうち、「書いては消す」のような「V1 テハ V2」文、「雨が降っても雪が降っても、試合は行われる」のような「V1 テモ V2 テモ」文、「降ったりやんだりの天気だ」のような「V1 タリ V2 タリ」文を研究対象とする。

本研究で言う「反復構文」は、国広（1989：40）の「枠組的慣用句」の定義（「句全体のいわば文法的な枠組みの部分だけが固定していて、その中で用いられる名詞・動詞などの実質語はかなり自由に入れ替えることができるもの、つまり変項を含んだ慣用句」）に従うものである。この国広（1989）の「枠組的慣用句」に当てはまると思われる反復構文を集め、各反復構文の表す意味を分類すると、「例示」「選択」「反復」「不定」の大きく四つに分けられることに気づく。本研究が分析する「V1 テハ V2」文、「V1 テモ V2 テモ」文、「V1 タリ V2 タリ」文の三つの反復構文は、「V1 テハ V2」文は「反復」、「V1 テモ V2 テモ」文は「選択」と「反復」、「V1 タリ V2 タリ」文は、「例示」と「反復」と「不定」の意味を表している。これらの三つの反復構文の中には、「居ても立ってもいられない」、「似たり寄ったりだ」、「願ったり叶ったりだ」のような慣用的な表現もあるが、ほとんどは固定的な慣用表現ではなく、様々な動詞を用いることができる。しかし、このような反復構文に現れる動詞には意味関係、提示順序、出現形に一定の制約があり、無制限に用いることはできない。各反復構文の意味を明らかにするためには、各反復構文に現れる動詞の意味関係や出現形といった特徴を明らかにする必要があると考え、本研究ではV1とV2に現れる動詞に着目し、分析を行った。

第1章では本研究の目的と研究対象を示すとともに、研究手法を示した。本研究では多くの実例を観察することによって、その中から規則性を見つけ出し、記述するという研究手法をとる。そのための言語資料として『日本語書き言葉均衡コーパス 2009年度版』（以下、BCCWJ2009とする）を利用する。このようなコーパスを使うと、内省だけでは捉えることが難しい（あるいは事実上、不可能な）言語事実や言語の使用傾向をつかむことができる。また、先行研究で不可能とされてきた表現が見つかることもあり、そのような例の特徴を詳細に見ることによって、新たな規則を指摘することも可能となる。本研究はこのようなコーパス利用の利点を生かした研究であることを述べた。

第 2 章では、反復構文に関する先行研究について概観した。これまでの研究において、反復構文の具体例やそれらが概ねどのような意味を表すかについては指摘されているが、各反復構文の V1 と V2 に来る動詞にはどのような特徴があるか、それによって反復構文がどのような意味を表すのかについて十分な説明がされていない。そこで、本研究ではこれまでに分析されてこなかった各反復構文の V1 と V2 に来る動詞に注目し、コーパスを用いることによって動詞の意味関係や出現形といった特徴を明らかにすること、それに加え従来指摘されてこなかった新しい事実を指摘することを述べた。

続く第 3 章から第 5 章は、具体的に実例を観察することによって、三つの反復構文における複数の用法について分析した。その結果、以下の点を明らかにした。

1) 「V1 テハ V2」文

「反復用法」

- ・ V1 と V2 で表される事態が「V1→V2→V1→V2…」と繰り返すことを表す。
- ・ V1 と V2 は可逆的反義関係（例：「書く/消す」「(波が) 寄せる/返す」「歩く/止まる」等）または一連の動作を表す関係（例：「ワインを飲む/チーズをつまむ」等）にある。

（例）彼は原稿を書いては消した。

彼はワインを飲んでではチーズをつまんだ。

「習慣用法」

- ・ V1 の事態（条件）が成立するとき、よく V2 の事態（結果）が成立することを表す。
- ・ V1 と V2 は広い意味での「条件」と「結果」の関係にある。

（例）彼は暇を見つけては散歩に出かける。

その男はよく酒を飲んででは暴れる。

2) 「V1 テモ V2 テモ」文

「選択並列用法」

- ・ V1 の場合にも V2 の場合にも、主節で表される事態が成立することを表す。
- ・ V1 と V2 は広い意味での同類関係（反義関係を含む）にある。

（例）雨が降っても雪が降っても、試合は行われる。

勝っても負けても悔いのない試合がしたい。

「反復用法」

- ・ どれだけ V1 (=V2) が続いても、一般的にその結果として帰結するはずの事態とはならないことを表す。

- ・ V1 (=V2) は「進展性（一度動作・変化が止まっても、断続的に同じ動作・変化を続けることができる性質）」のある動詞（例：「食べる」「走る」「抜く」「追う」「拭う」等）である。

（例）食べても食べても太らない。

走っても走ってもゴールが見えてこない。

3) 「V1 タリ V2 タリ」文

「例示用法」

- ・ 当該場面において、V1 や V2 をはじめとする複数の事態が成立することを表す。

- ・ V1 と V2 は同類関係にある。

（例）見たり聞いたりしたことをレポートにまとめる。

台風で電車が止まったり道路が通行止めになったりした。

「反復用法」

- ・ ある一定期間内に V1 と V2 の二つの事態が生じることを表す。

- ・ V1 と V2 は反義関係にある。

（例）昨日は一日降ったりやんだりの天気だった。

怪しい男が店の前を行ったり来たりしている。

「不定用法」

- ・ V1 と V2 のうちどちらか一方が生じることを表すが、どちらが生じるかは決まっていないことを表す。

- ・ V1 と V2 は反義関係にある。

（例）天候によって自転車を使ったり使わなかったりする。

靴が大きすぎたり小さすぎたりすると歩きにくい。

第 6 章では、第 3 章から第 5 章の結果をまとめた。そして、三つの構文に共通して現れた「反復用法」を比較し、共通点と相違点を指摘するとともにそれぞれの特徴について述べた。